

アライを大切にしましょう

1977年8月、イギリス、アランデルの6回目のワークショップでの
オープンクエスションのタペにてのハービー・ジャキンズの話

被抑圧者グループがその抑圧にはねのけようとしはじめると、その戦いが何かほかのものにすりかえられようとしてしまうパターンに悩まされます。解放を求めているすべてのグループに必ずみられるパターンのひとつは、アライが持っている罪悪感を悪用してアライを操作することです。もちろんこのやり方では解放は進みません。

女性解放の運動家の一部は、男性に罪悪感をもたせようとする混乱と、女性に対して向けられていた傷をそのまま男性に返してしまう混乱を持っています。同じように、アメリカでは黒人解放のリーダーがアライの罪悪感を悪用して、アライを操作する状況があります。ミドルクラスの若い人たちが、彼らの両親に罪悪感を与えていることに気づいたら、同じように相手を操作していることがわかるでしょう。たとえば、

「お母さんは親として失格だね」

「ごめんね、じゃあどうしたら許してもらえるの？」

「じゃあ、車使わせてよ」

ここでも同じ現象がみられましたね。昨夜の若い人たちの報告の中にも、ちょっとみられました。ほとんどの報告内容はすばらしいことでクリアなことなのに、あらら！入っちゃいましたね。罪悪感が報告の中にあられていたことに気づいたとき、みんなの顔を私はみていました。参加者の人たちが不安を感じていることがわかりました。

これはもったいないことです。これではうまくいきません。怖いですね。戦うべき相手に一緒に立ち向かう代りに、アライを責めることになってしまいます。だから私たちはアライを大切にする必要があります。

We Have to Treat Our Allies Like Allies

プレゼントタイム2004年7月号37 ページより

Harvey Jackins

翻訳 藤田尋美、エマ・パーカー

監訳 望月佐知子

この文章の著作権はラショナルアイランド社にあります。(翻訳文2007年。
原文1977年)。

この翻訳はあくまで草稿として扱ってください。